

追悼

井口哲夫君 (1945~1976)

森本雅樹*

「チョット妙な手紙が来たんだけど」ある日海部さんが私に言った。横浜で応用化学のマスターコースにいる学生で、電波で星間分子をやりたい、という話である。電波でみつかった星間分子はまだ4種類くらいで、やっと一部で重要性が認識されはじめた当時のこと（1969年の秋だったように思う）それも、畑ちがいのマスターコースの学生さんが……。海部さんの「チョット妙」といったのはそんな意味だったろう。これが井口さんと私たちの出会いのキッカケとなった。

「トニカク会ってみては」ということになり、井口さんは本郷の天文教室にやって来る。井口さんらしく、事務室がある3階を素通りして4階まで行ってしまい海部(かいふ)さんのことを「ウミべさんはいますか」といってとびこんで来たという。

常に将来をみつめ、どこにでも人なつこく、そして勇敢にとびこんで行く、そしてちょっとオッチョコチョイ。それから7年間の井口さんとのつき合いをこの出会いは象徴しているかのようである。

井口さんは、1971年、横浜国立大学大学院(応用化学)で修士の学位をとられた。論文は、「OH 1667 MHz 遷移の周波数の計算」。三鷹に出入りして私たちとの議論もあるが、横浜国立大の樋口先生の御指導によるものである。

修士卒業と同時に博士課程(東大天文)に入学、いまや分子は「チョット妙」どころではない、ブームである。海の向うでは20種に余る分子がみつかりこちらでは6m望遠鏡で観測がはじまろうという時である。こんな観測の計画を進めるかたわら、持ち前の「どこにでもとびこんで……」と化学のセンスで、電気通信大学の中川先生のところにとびこんで行った。のちに学位論文となった「星間塵上での分子の生成」は中川先生の御指導に負うところが大きい。

博士課程の間に、井口さんの興味は次第に観測とその解釈といった面にひろがって来る。海部さんたちと一緒に銀河中心の研究もその一つである。また、1974年のメチルアミン(NH_2CH_3)の発見は井口さんの分子生成の理論も一つの動機となっている。

メチルアミンの発見はあったが、三鷹のミリ波望遠鏡はつらい時期であった。人手、お金……の足りない中を観測態勢を整備して行かねばならない。博士の学位をと

* 東京天文台

M. Morimoto: Tetsuo IGUCHI (1945~1976)



ワインレブ氏をかこんで、中央長顔が井口氏

って学術振興会奨励研究生となられた井口さんは、このつらい仕事にとり組んでみんなと一緒によくがんばられた。去年(1975年)秋、札幌での天文学会で、三鷹から分子のスペクトルの観測の論文がいくつか発表されたのをおぼえておられる方もあるだろう。「態勢」はやっと軌道にのったのである。

井口さんは、札幌の学会に、こうした仕事の間にはじまった腰の痛みをおして出席された。汽車の中ではたびたび姿勢をかえたりずい分つらかったらしい。しかし井口さんはこの成果をみんなに見てもらうためやっぱり出席したかったのだろう。

この腰の痛みは実は癌であった。半年あまりで井口さんの体をむしばんでいった。そして1976年6月6日おひるすぎ、結婚3年の奥様(清美さん)はじめ御家族のみまもる中を息を引きとられた。30才だった。

なくなられた時は、学術振興会の奨学金もきれ、天文学教室研究員という、どちらかといえば不安定な身分であったが、学問的にはまさにあぶらのりはじめたところであった。化学出身という天文学では得難いバックグラウンドを持って、これからの仕事の成果が大いに期待されていた。こんなところで井口さんを失うことは非常に大きな損失である。また、それにも増して、こんなところでなくなられた井口さんはどんなにか残念だったことだろう。御遺族のみなさんにもお悔み申上げたい。

井口さんがなくなってちょうど1週間、6月13日には、昨年来苦心して組立てていた音響光学素子を使った分光計での初観測が成功した。ミリ波では世界ではじめてでいまのところ世界一の高分解能である。井口さんも大いに期待しておられたものである。ちょっとのところまで喜んでもらえなかった。